

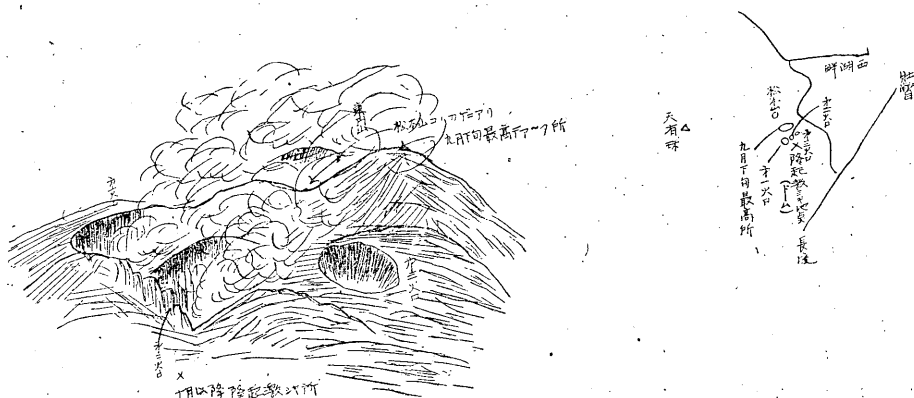
昭和 19 年 9 月下旬及び昭和 20 年 1 月 下旬の有珠火山調査

齋藤 義文*・菊地 繁勝*

昭和 19 年 9 月 25 日より 3 日間及昭和 20 年 1 月 21 日より 2 日間の調査による。以下 9 月下旬と記せるは、昭和 19 年、1 月下旬と記せるは昭和 20 年である。昭和 19 年 6 月 23 日有珠山麓九万坪噴火以来半歳を経過し其の間新火口は其の位置稍々変化したがつ着々として火山の態形を整へ且つ規模も次第に大きくなり噴火当初は 239 米の独立標高を有する松本山を最高として火口附近は 100 米程度の平坦な丘陵地帯の畑であつたが 9 月下旬に於ては既に火口附近は隆起により一大新火山を形成し其の高さ 250 米と推定され松本山を遙に俯瞰する状態にして尙且上昇の傾向あり、1 月下旬調査時に於ては前回と比較して顕著な変化は認められなかつたが新山の一部分が可なり隆起して居り且つ亞硫酸ガスの稍々強きを感じた。9 月下旬に於ては登山困難を感じる様な事は無かつたが 1 月下旬の登山に於ては全山水盤に包まれ雪さへつかぬ急峻な所多く登路も極めて小範囲に限定せられ且頂上附近は間断なき降雪と熱気の爲に踵を没する泥濘にして山頂一面は濛々たる噴火と水蒸気に包まれ詳細に調査出来ずに下山するの他なかつた。

火口の位置及大さ 9 月下旬調査の時に於ける火口は大有珠の東微北 239 米独立標高の略南東に位置して三ヶ所北 50 度東の走向を有する地裂の中に殆んど接続して出来て居り第 1 図の様

第 1 圖



火口、第 2 火口、第 3 火口と名付くれれば第 1 火口は径 100 米、第 2 火口は径 70 米、第 3 火口は径 30 米位と推定された、併てし 1 月下旬調査の時には火口の位置は殆んど変化ないと思はれたが、

* 室蘭測候所

前回の時の様な確然とした火口は認め難かつたが山頂一面の水蒸気と噴煙の爲之を確める事が出来なかつた。

爆発及噴煙の状況。9 月下旬調査の当時は第 1 火口は既に老年期に入つたようで只眞白な水蒸気を火口壁及底より噴出するだけで完全な円錐形をした火口の全貌を認むる事が出来たが第 2 火口は未だ壯年期らしく活動旺盛にしてセメント状の微細な火山灰及砂礫を伴つた茶褐色の噴煙を猛烈に噴出して居て火口の一部分より望む事が出来なかつた。第 3 火口は出来たばかりのようで 6 月中旬以来の新火口生成課程と同様に間歇的な爆発を繰返し破碎せる岩石を混へた眞黒な噴煙を上げて居たが沈静時には水蒸気を認める事が出来なかつた。1 月下旬の調査の時は全山一面に眞白な噴煙に包まれてどの火口が特に烈しい活動をして居るかと言ふ区別は認められなかつたが 9 月下旬に於てはかすかに硫黄の臭を感じた程度にすぎなかつたけれども今回の登山当時は噴煙中に入れば可なり強き亜硫酸ガスの刺激を感じ呼吸困難を覚えたが目を開く事が出来ないと言ふ程ではなかつた。前年 9 月下旬より 1 月下旬迄の間に度々の大爆発はあつたが何れも第 1 火口より第 3 火口中の何れかに起つたようで壯警郵便局長も上記の様に話された。7 月初旬迄に出来た火口は殆んど埋没されて第 1 火口西側に辛ふじて其の痕跡を認め得る事が出来る程度であつた (9 月下旬)。次に壯警保線分区の日志より昭和 19 年 8 月 2 日以来 1 月下旬迄に於ける爆発、降灰及地震の模様を転記すれば次の通りである。降灰は線路上のみの深さ。

昭和 19 年 8 月 21 日地震 32 回。同 22 日 35 回、壯警川 1.3 米減水。同 23 日 37 回、同 24 日 62 回、同 25 日 100 回、同 26 日 150 回、同日 14 時 30 分頃大爆発黒煙大石を混じて噴火し一時附近薄暗くなる線路上稍々降灰あるも大部分は西湖畔方面に流る。線路附近に噴石数個落下す。雷鳴電光あり。フカバ部落に焼石落下し附近の家火事となる。15 時 28 分頃豪雨となり長流川 1 米増水す。8 月 27 日は昨日に引続き黒煙噴出中降灰線路上約 10 耗壯警市内 25 耗。8 月 28 日地震 120 回。29 日 100 回、降灰 10 耗。30 日 100 回、降灰 8 耗、黒煙噴出硫黄を混じたる降灰の爲作業困難なり。31 日 130 回、6 時より 16 時迄強い地震数回あり。9 月 1 日 130 回。2 日 135 回、13 時 05 分頃大爆発全山黒煙に包まれ附近眞暗になる。13 時 20 分頃終る。3 日 80 回、降灰 5 耗。4 日 50 回。5 日 96 回、フカバ附近壯警川河床陸となる。6 日～8 日毎日 130 回、降灰 5 耗。9 月 9 日地震 180 回、16 時 15 分頃突然大爆発噴煙天に沖す。岩石線路内に落下す。降灰 10 耗。10 日～13 日地震 120 回～150 回。11 日 7 時頃より鳴動あり。12 日鳴動稍々静まるも地震愈々強くなる。14 日地震 160 回、黒煙 13 度～16 度の高さに昇る。15 日～16 日地震回数変化なし。16 日降灰 10 耗。以後地震回数は調べてないが毎日現在迄と殆んど変りない。9 月 17 日 8 時頃より黒煙昇る。降灰ありたるも大部分伊達方面に流れる。9 月 18 日山は一面雪の降つた様に降灰あり 10 時頃降灰多量にして目も口も開けられず。9 月 20 日一昨日よりの噴火に

よる降灰は硫黄を混へ一面に黄色くなる。9月21日強い地震数回。26日迄同じ。23日降灰5耗。9月27日8時50分頃黒煙上り爆発10時05分頃止む。降灰30耗。9月28日8時50分～9時15分頃迄に小爆発数回あり。降灰20耗。9月29日0時45分頃爆発10時15分頃今迄にない強い地震あり。降灰30耗。10月1日0時40分頃爆発。電雷の如き火花散る。線路上に黒煙被る。1時36分頃及2時49分頃大爆発。3時39分頃強き地震あり。4時40分頃止む。5時37分頃強き地震及鳴動あり。7時05分頃爆発。線路上に岩石落下す。8時頃止む。後1日中黒煙上る。降灰130耗。12月2日～15日、強い地震盛んにあり。9日降灰10耗。14日稍々降灰あり。16日強き地震盛んにして19時50分頃爆発。20時頃止む、噴煙南東に流れ線路上に被害なし。10月17日～30日、強き地震盛んにあり。31日8時15分頃爆発。9時50分頃より降灰の爲暗黒となる。10時15分頃稍々明るくなり10時30分頃に至りて止む。線路上降灰10耗。以後12月2日迄毎日強い地震あり。風向により降灰あるも被害なし。12月3日3時頃2回の強き地震と共に黒煙を發して爆発降灰あり。以後白煙を噴出するにとどまり爆発はないが昭和20年に入り地震の回数は増加の傾向あり。

以上保線分区の日記中の主なるものであるが地震に付いては何れも強震となつて居たが之れは強い地震の事と思はれる故其の様に記した。大体軽震から弱震程度のもと思はれる。降灰は12月末以来は只積雪面を彩る程度のものの如く認められた。積灰は8、9月中に起つた豪雨の爲に可なり流失し且つ降雨中は川となつて流れたであらうと思はれる。古い表土迄洗ひ去つた跡が隨所に見受けられ特に西湖畔の側に多かつた。

隆起及地裂 9月下旬調査の際は村界附近及フカバ部落の手前までは以前と変りなく顕著な異状は認められなかつたがフカバ部落は舊状一変して隆起の状態も激しく焼失した家屋もあり壯瞥川の橋は破壊せられ河床の隆起甚しくかつての平和境フカバの面影もなき程になつて居たが1月下旬に於てはフカバ部落はどの辺だつたらうと思ひ出さねばならぬ程に変化しかつての部落は今は小山になつて居た。

火口附近の隆起は甚しく9月下旬には第2火口北側の地点が最高と思はれ其の標高海拔250米と推定された旧の西湖畔に通ずる山道は跡方もなく急峻な絶壁の中腹に所々其の痕跡を残して居るにすぎない。1月下旬に於ては山全体の隆起はそれ程顕著には認められずバロメーターによる西湖畔との高度差は270米を示したが火口南側第1図に於ける×印の附近著るしく隆起して居る様であるが噴煙及水蒸気の爲に詳細見る事が出来ず或は大有珠の如き円頂丘を生成しつゝあるのではないかと思はれるが其の高さは尙数10米の高度を有する事は疑ひない、壯瞥郵便局長も何とかしてあの頂上を見たいと毎日注意して居るが殆んど其の姿を見せてくれないとの事であつた。

膽振從貫鉄道は其の隆起の甚しい部分を旧線より200米程長流川の方に寄つて新線を敷設し開通

したが未だ路盤の変化は火山による爲か新道床それ自体の変化であるかは判明しないとの事であつたが旧線の方は最早列車の運行は及びもつかぬ程に破壊されて居た(1 月下旬)。地裂は積灰の爲に埋没して殆んど其の所在も柳原附近を除いては見受けられないが壯瞥に通ずる道路を横断して旧の西湖畔に通ずる道路附近に山麓より鉄道路附近迄達する巾 10 米深さも 10 米と推定される大地裂あり、雨水の爲に尙一層拡大されたものとも思はれるが之れによつて壯瞥、長流間の交通は遮断されてしまつた。壯瞥市街は隆起による変化は認められなかつた。

壯瞥川の池水變化 壯瞥川の湛水は稍々拡大した様に認められるが顯著なるものではなく新に排水が掘られてあつたが水は流れて居なかつた。1 月下旬にも殆んど何等の変化は見られなかつた。